

「園芸療法士」が活躍の場を広げている。従来の医療・福祉の分野をはじめ、最近では他の資格や既存のサービスなどと組み合わせることで、独自の道を開拓する者も出てきた。

多分野でニーズ高まる 園芸療法

自然・植物と継続的に関わり

「園芸療法士」育成・確保に力

兵庫県立大学大学院 豊田正博教授

人は緑のある景観や植物を見るだけで、心が癒やされ、ストレスが軽減されることが科学的にも証明されている。また、

植物の栽培では日光に当たり、頭を使い、身体を動かすことで心身機能に刺激が与えられ、人との交流機会も生まれる。

園芸療法はこうした効用に着目し、自然や植物と継続的に関わりを持つことで、病気の予防や健康改善、生活の質の向上などをめざす療法だ。医師らと連携して活用されている」と話す。

園芸療法士の効用について研究する、兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科の豊田正博教授は「最近では高齢者の認知症や生活習慣病の予防だけでなく、一般市民のうつ予防や引きこもり解消に向けた支援など幅広い分野で活用されている」と話す。

例えば、全国の中でも園芸療法士の育成・確保に力を入れている兵庫県では、2002年度から「兵庫県園芸療法士」という独自の資格制度を設けている。一定の要件を満たした者を知事が認定する仕組みだ。

認定を受けるには、同県淡路市にある兵庫県立淡路景観園芸学校で250時間の座学と500時間の実習を修了する必要がある。これまでに258人（今年3月末時点）が認定されている。

同校の主任景観園芸専門員も兼任する豊田さんは「これまで修了生の多くは、病院や介護・福祉施設で働くことが多かったが、最近は起業する人も増えている」と話す。

園芸療法で期待できる主な効果

効果	内容
精神的効果	ストレス軽減、注意力・記憶力の維持・向上、意欲・自信の回復 など
身体的効果	免疫力の向上、基礎体力の回復、運動機会の確保 など
社会的効果	コミュニケーション能力の向上、人間関係の構築、就労の基礎となる技能習得 など

※淡路景観園芸学校の資料を基に作成



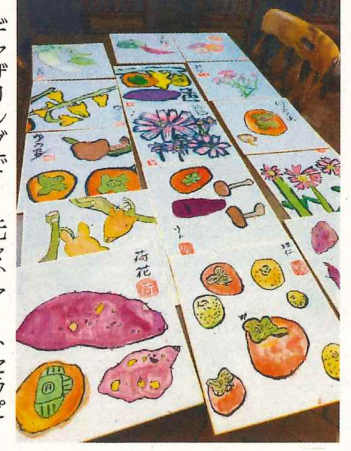
これまで数多くの園芸療法士を指導・育成してきた豊田さん

アートセラピーと園芸融合

Arts&Crafts for Health 桑島一絵さん



桑島さんは園芸療法実習のスーパーバイザーとして、学生が作るプログラムの添削や実践のアドバイスも行っている。教室に通う子どもたちが描いた野菜や果物の絵



ギャザリングではアートセラピーの「色彩」のエッセンスを、絵画では園芸療法のエッセンスを取り入れることで相乗効果が生まれ、どちらの教室も幅広い年齢層から支持を集めている。

絵画と花の教室
20年に兵庫県園芸療法士の認定を受けた桑島一絵さんは、同県三田市で絵画と花の教室「Arts & Crafts for Health」を開いている。

Arts & Crafts for Health（アートアンドクラフツフォーヘルス）を主催し、週に2日、絵画を教えるながら、月に1回、ギャザリング（寄せ植え）教室を開いている。

桑島さんは過去に夫の仕事の都合でイギリスに3年間在住したことがあり、現地でフラワーアレンジメントなどを学んだ。その経験から、植物が持つ「癒やし」の効果に興味を抱くようになった。

植物とふれあうリハビリを

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院 楠美和さん

兵庫県立リハビリテーション西播磨病院に勤務する楠美和さんは、今年3月に淡路景観園芸学校を卒業し、4月から兵庫県園芸療法士として働き始めた。

同病院では、脳卒中やパーキンソン病の患者が多く入院しており、さまざまな「リハビリ」メニューが設けられている。園芸療法もその一つで、楠さんは医師の指示に応じて患者と一緒に庭で植物を植えたり、花を生けたりする。



患者さんの笑顔が一番のやりがいと話す楠さん

参加し、担当する患者の状態も確認している。「中には盆栽をやりたいという人もいます。農家の方からは、逆に野菜の育て方などを教えてもらうこともある」と笑う。